

ラブライブ！ Another おにぎり自転車と一輪の花

伊崎ハヤテ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

音ノ木で老舗の御握り屋、「五本指」の一人息子伍原 隼は
祖父の仕事で隣の公園でおにぎりの販売をすることに。

彼を手伝ってくれた少女、小泉 花陽との出会いは彼に何をもたらすのか。

はじめましての方ははじめまして、そうでない方はこんにちは。
穂乃果編と並行してこちらの花陽編も不定期ながら書いていこう
と思います。穂乃果編でも伍原は登場していて、凜編から花陽編の話
は考えていました。頭に溜めこんでいるままだといつ消えてしまっ
かわからないので書いてみることにしました。

かよちゃん推しの方、かよちゃんに関する表現や喋り方等で「ここはこ
うすればいい」等のアドバイス、ご指導をお待ちしてます。どんどん
送って下さい。

目次

大きな口を広げて食べる君は

大きな口を広げて食べる君は

音ノ木坂にある老舗の御握り屋、『五本指』。そこが伍原 隼の家であつた。

「ただいま」

帰宅した隼を迎えたのは母親だつた。

「あ、隼！ ちようどいい所に！」

長身の彼の姿を見た母は助かつたと言わんばかりの勢いでやつて来た。

「あなた、おじいちゃんの代わりにおにぎりの売り出しに行つて来て！」

「は、オレが?!」

彼の祖父はおにぎりを詰めたボックスを自転車の荷台に積んで隣の公園で売り出しをしている。そのことを隼は知ってはいたが、自分がやることになるとは思つてもいなかった。

「おじいちゃん、腰を痛めちゃつてね。あそこにもお得意さんはいるからやらないわけにはいかないのよ」

「だからつてオレがやるのかよ?」

「この店を継ぐならこれも修行の一つだと思いなさい。老舗『五本指』の専務の命令です。行つてきなさい」

母が専務を名乗つたらもう言う事を聞くしかない、諦めた隼はため息をついた。

「わかつたよ、行つて来るよかーちゃん」

「専務と呼びなさい！」

隼は渋々店の入り口へと向かつた。

「何やつてんだらうな、オレは……」

夕焼けに染まる町を隼は自転車漕ぐ。後ろの荷台には沢山のおにぎりが入ったボックスと、『五本指』と書かれた旗が乗せられている。

「いきなり代わりをやれだなんて……」

図体のでかい隼には祖父の使っていた自転車は少し乗り辛くて。

足が上手く動かせず、ふらふらと不安定な動きになってしまう。

乗るのは諦めて自転車から降りて引っ張ることに。スピードは遅いが、速足でいけば時間には着くだろう。

「あ、イツキーだー！」

そんな隼に声をかけるサイドポニーの女の子。高坂 穂乃果。隼の一つ上の幼なじみだ。

「お、穂乃果」

「その自転車どうしたのー？ 旗までくっつけて！」

穂乃果の指摘に苦笑いしながら自分が陥った状況を説明してやる。

「ふーん、隣町まで出張営業かあ……。そうだ！ 穂乃果も手伝おっかー！」

ずいと顔を詰めてくる。隼は彼女の考えを読む。

「手伝うとか言ってお前、公園で子供達と遊ぶ気だろ？」

「えへへ、バレた？」

「バレバレだ。何年幼なじみやってると思ってるんだ？」

「十年！」

「元気よく答えりやいいってもんじゃねえ」

軽い漫談をやっていると、隼ははつとなる。

「やべ、時間がない！ オレ行くわ！」

「あ、穂乃果もお父さんから大事な話があるから早く帰って来いって言われてるんだった！」

じゃあな、うん、と互いに背を向けて走り出す。

「イツキーー！」

突然後ろからの穂乃果の声に足を止め、振り返る。

「フアイトだよっ！」

両腕を胸の前にやってのポーズ。彼女がよくやるポーズだ。それに対して隼の返しは決まっている。

「おうっ！」

右腕に左手を置いて力を込める。それを見た穂乃果はにっこ笑った。そして今度こそ背を向けて走って行った。彼女のポーズを見ると何となく力が湧いてくるのを感じる。

「急ぐか！」

自転車を引っ張って走る足に更に力が入った。

「着いたのはいいけど……」

隼は母に指定された公園で立ち尽くしていた。どうすればいいのかよくわからず、スマホで母に指示を求める。するとすぐに返事が届いた。

『しばらくそこで待てばあんたと同じ歳の子が手伝ってくれるはず。その子を待て』

「待ってつてもな……」

一度も顔を見たことない奴と手伝いをしろと言われて、はいそうですか、と簡単に了承できるはずがない。隼はため息について公園を見渡す。

夕陽が遊具を染めてもなお、子供達はその遊具で遊んでいる。

「最近の子供にしては遊具で遊んでるんだな」

その様を見て懐かしさがこみ上げる。

——よく暗くなるまで穂乃果や海未、ことり達とよく遊んでたっけ——

「あ、あの——」

隼の回想を振り払うように声がかけられる。

「んあ？」

せつかくの楽しい思い出に水を注された形になった隼は少し不機嫌な返しをしてしまう。

「あ、ご、ごめんなさい！ お邪魔でした？」

声をかけてきたのは、自分と同じ年位の女の子だった。ボブと呼ばれる髪型に、桃色の瞳。チェックのスカートからは黒いタイツに包まれた脚が伸びる。そのスカートの柄は、さつき会った穂乃果と同じもので、隼はこの子も穂乃果と同じ学校の子だと悟った。

「あ、こっちこそ悪い。何か用？」

「あの、御握り屋さんですよ。その旗」

図体のかい隼に少し怯えているのか、恐る恐る自転車に付けられた旗を指さす。

「ああ、そうだよ。いつもはうちのじーちゃんかやってるみたいだけ

どな。今日は腰を痛めて、代わりにオレがやってる」

極力女の子を怖がらせないように話す。彼女は隼の言葉にえっと息をのむ。

「え、おじいちゃんの具合は大丈夫なんですか!？」

「まあぎっくり腰みたいだし、しばらくは無理そうだな」

「そうなんですか……」

彼女はしゅんとしている。暫くの沈黙の後、隼は気付く。

「もしかしてキミは、いつもじーちゃんを手伝ってるって子か？」

「あ、はい。小泉 花陽って言います」

花陽と名乗った女の子はぺこりと頭を下げる。

「キミが手伝ってくれるってお袋からは聞いてるんだけど、何を手伝ってくれるんだ？」

「はい、いつもはおじいちゃんと一緒に『おにぎりはいりませんか』って宣伝するんです。するとお客さんが来るからおにぎりを売ればいいだけです」

「つまり、呼び子になってくれるってこと？」

「はい、花陽はおじいちゃんにお世話になってましたから、お手伝いしたいんです」

隼は彼女の瞳を見る。その優しい瞳からは真剣さが伝わってくる。隼はこの子が言っていることに嘘はないと確信した。

「わかった。オレもこの仕事をするのは初めてだから助かる。よろしくな、小泉さん」

「あ、は、はい！ こっちこそよろしくお願いします！」

そのオドオドした態度に初々しきを感じながらも隼は準備を始めた。

「みんなー！ おにぎり屋さんが来たよー！ お腹が空いてる子は集まれー！」

花陽の声に公園で遊んでいた子供達の視線が一気に隼達へと向いた。そして歓喜の声と共に子供達が押し寄せてきた。

「い、伍原さん！ 私がおにぎりを配りますから伍原さんはお金の方をお願いします！」

さつきのオドオドした少女の面影はどこにもなく、その真剣な眼差しに圧倒される。

「わ、わかった!」

花陽は開かれたボックスからおにぎりを取り出し、子供達に配っていく。

「はい、どーぞ」

「わー! はなよおねえちゃんありがとう!」

「お礼と、お金は隣のおにいさんにあげてね」

「うん!」

子供達はおにぎりを受け取ると、隼の方へ行き、百円玉を一つ差し出す。

「おにーさん! これ!」

「はいよ、まいどあり」

隼は子供達を怖がらせないように笑顔を作りながらそれを受け取っていく。

「伍原さん、双子さん二人分の勘定お願いします!」

「あいよ!」

少し前に会ってそれほど時間が経っていないのにも関わらず、二人は連携しておにぎりを売っていった。

「これで、全部売ったな」

「はい、完売です!」

ふつと息をつく隼に花陽は笑顔を向ける。その笑顔につられて隼も笑う。

「それで、花陽の分は……」

「え?」

「あ、ごめんなさい、言い忘れてましたね。おじいちゃんは売り物とは別にもう一つおにぎりを用意してくれてるんです。手伝ってくれたお礼にそれを貰ってるんです」

「そうなのか。でも、全て売っちゃったな」

「あ、そっか。完売でしたからね……」

花陽はしゅんとして視線を落とす。本当に残念がっている表情

だった。

「ごめんな、勝手がわからなくてキミの分まで売っちゃって……」

「いいんです、花陽が甘え過ぎてただけですから……」

力なく笑う彼女を見て、なんとかしてあげたいと思った隼はもう一度ボックスの中を覗く。すると大きなおにぎりが二つ。

「そういうええば入れてたな……」

図体がでかい隼が握った大きなおにぎり。大きすぎて誰も買ってくれず、ここでなら売れるかもと期待してボックスの奥に突っ込んでいた。子供達が商売の相手なので売れないと考え、売り物にしなかったのだ。

「あのさ、じーちゃんが握ったものじゃないんだけどさ」

「はい……?」

「オレの握ったこのでか過ぎるこいつでよければ……」

隼がボックスから子供達に売った代物よりも三倍も大きなおにぎりを取り出した。それを見た瞬間、花陽の桃色の眼は大きく見開かれた。

「うわあ〜！ おつきなおにぎりだあ〜。おいしそう〜」

瞳は輝き、口からは涎が出そうな勢いだった。それを見ている隼の視線に気がついたのか、身を乗り出していた花陽は距離をとる。

「ご、ごめんなさい！ 花陽つたら……」

慌てる彼女について笑みがこぼれる。そんな彼女に隼はおにぎりを差し出す。

「いいよ、オレが握ったこいつでよければ食べな」

「え、いいんですか?!」

「ああ。オレ一人じゃ売れなかっただろうしな。これはオレからのお礼だ。一つやるから少し休憩しようぜ」

「はい！」

今までで聞いた中で一番元気な返事だった。

「これを毎週手伝ってたのか？」

公園のベンチに座って隼は花陽に尋ねた。祖父の道楽とも言えるこの仕事を手伝ってくれる人がいたことに驚いた。どうして手伝っ

ているのか不思議に思えた。

「花陽が小さな頃、この公園におじいちゃんがやってきてくれたんです」

両手で大きなおにぎりを持ち、それに視線を向けながら彼女は語る。

「花陽は、ご飯が大好きでおにぎりも大好きだったから、おじいちゃんのおにぎりを毎週楽しみにしてたんです」

彼女の視線は自転車へと移る。自転車から伸びる旗が風に揺らめいている。

「そんなおじいちゃんのおにぎりは、花陽以外買ってくれる人はそんな多くはなかったんです。このおいしいおにぎりを、もっと他の人にも食べてもらいたい、そう思ってお手伝いを始めたんです」

隼の方を向いてにこりと笑う。その優しい笑顔に隼は心が温かくなるのを感じた。

「そうか、毎週じーちゃんがわくわくしながら自転車を漕いでいた理由がわかったよ。小泉さんがいたからなんだな」

「いえ、私なんか！ 花陽はいつもおじいちゃんの邪魔をしてるんじゃないかって心配で……」

「そんなことはないと思うぞ。じゃなきゃ場所を変えてる」

「あ、そうですね……」

励まそうと肩を叩こうとしたが、驚かれちゃ駄目だと思いなおし、笑顔で応えることにした。

「ま、今日はじーちゃんへの日ごろの感謝の代わりに、オレのおにぎりを食べてくれや」

「あ、はいー」

元気な返事に笑顔が零れる。

「いただきます」

花陽は三角の頂点を頬張る。眼を瞑って咀嚼している彼女の横で隼も食べることにした。

自分が握ると大きくなってしまおうおにぎり。花陽は見ただけで嬉しそうな顔をしてくれたけど、食べたらどんな反応をするだろうか？

それが気になって食べる口を止めて彼女の方を見た。

「ん〜……。おいし〜♪」

眼を細め、顔を上気させてぱくぱくとおにぎりを食べている。

「ふんふん〜♪」

美味しいと思ってくれているのか、小さく鼻唄が聞こえてくる。それが嬉しくて隼はおにぎりを食べる花陽を微笑みながら見ていた。

「……………あの?」

「え?」

突然彼女が食べる口を止め、こちらを見てくる。しまった、見過ぎたか、と隼は後悔した。

「あの、どうして泣いてるんですか?」

「え?」

花陽に指摘され、眼の下をなぞる。彼女の言った通り湿っていて、涙が流れていた。

「あ、あの! このおにぎり、もしかして大事なものだったんですか?」

「それなら——」

「いいんだ。大丈夫」

涙を拭い笑顔を作る。それでも彼女は心配そうな顔でおにぎりを持ったままこちらを覗きこんでいる。

「オレはさ、こう、デカイだろ、図体がさ。で握るおにぎりも、こんなにデカくなっちゃってよ。あんまり食べてもらえる人いなかったんだ」

自分の手にある半分位になったおにぎりに視線を落とす。

「だからさ、こんなオレのおにぎりを美味しそうに食べてくれる人がいて、嬉しかったんだ。だから、かな」

説明している最中にも視界がジワリと滲む。それを無理やり拭き去り、苦笑い。

「おかしいだろ? こんな身なりの男がさ、こんな繊細なことで悩んでるんだぜ?」

それを聞いていた花陽はずいと隼に迫った。

「そんなことないです! 誰だって自分が作った料理を食べてもらえ

なかつたら寂しくて、悲しいですよ！」

少し鼻息を荒くして迫る花陽に隼は驚いていた。普段はオドオドしているのに、スイッチが入ると奥に隠れていた情熱が顔を出す、小泉 花陽はそんな子なんだなと理解した。

「それに、伍原さんのおにぎり、美味しいですよ？ 花陽が保障します」

にこつと笑う彼女の顔が眩しくてまた涙腺が緩む。それを悟られないように隼はおにぎりを食らった。

「おにぎり、ごちそうさまでした」

丁寧に花陽は頭を下げる。ただでさえおいしく食べてもらえた上にお礼までされて、隼は少し戸惑っていた。

「いや、ごちそうさそおそまつさまでした」

ふふ、はは、と互いに笑い合って花陽が尋ねてきた。

「そういうえば、おじいちゃんの具合は大丈夫なんですか？」

「ああ。ぎっくり腰をやらかして、痛めたらしくてな。すぐにはこの仕事に復帰は無理だろうな」

「そうですか……」

花陽のしゅんとした顔を見て、隼は口を開いた。

「オレ、来週もここに来るよ。そしたらさ、小泉さんも手伝ってくれるか？ またオレのでよかつたらおにぎり作ってくるからさ」

「本当ですか？」

花が咲いたようにぱあつと表情が明るくなる。それに隼は笑顔で応える。

「おう。元々はお袋に押し付けられた仕事だけど、小泉さんや多くの人にオレのおにぎり食べてもらいたいからな」

「はい！ 花陽も伍原、さんのおにぎりをもっと多くの人に食べてもらいたいです！」

「ありがとよ。じゃあ頑張って沢山握ってくるわ」

「頑張ってください！ 花陽、応援してます！」

「さっそく家に帰って仕込みでもしようかな。じゃあ、またな」

「はい、また！」

一は自転車を引いて彼女と別れた。少し歩いて後ろを振り向いた。ゆっくりと歩く花陽の後ろ姿が見える。

「また、か」

笑みがこぼれる。これから週に一回の楽しみが増えた。そう思う。隼の脚は行きの時よりも軽かった。